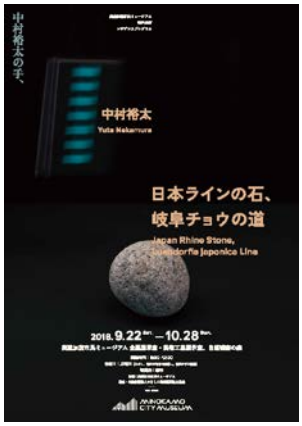
中村裕太｜日本ラインの石、岐阜チョウの道



会　　期：2018 年 9 月 22 日（土）～10 月 28 日（日）〈32 日間〉
会　　場：企画展示室、美術工芸展示室、自然観察の森
展示点数：インスタレーション 4 作品
観 覧 料：無料
入場者数：1,066 人

【内容】

美濃加茂市民ミュージアムでは毎年「芸術と自然」をテーマに、現代美術家によるレジデンスプログラムを開催しています。今年度は京都在住の美術家・中村裕太（1983-）を紹介しました。中村は、日本各地から陶片を拾い集め、その土地の文化や風習を読み解く《日本陶片地図》(2012-）を制作し、「あいちトリエンナーレ 2016」をはじめとする国内外の国際展で作品を発表しています。また、2017 年に名古屋市東山植物園で開催された「タイル植物園｜熱帯植物の観察術」では、本草学をはじめとした日本の博物学の黎明期へとその関心を広げています。

本展では、この土地にまつわる２つのストーリーラインが設定されました。ひとつは、1913 年に地理学者の志賀重昂（しがしげたか）（1863-1927）が木曽川に来訪し、「木曽川岸、犬山は全く（ドイツの）ラインの風景そのままなり」と手紙に記したことをきっかけに「日本ライン」と呼称されたこと、もうひとつは 1883 年に昆虫学者の名和靖（なわやすし）（1857-1926）が下呂市金山町で新種のチョウを発見し、後に「岐阜蝶」と命名されたことです。この２つのエピソードを手がかりに、作家は木曽川流域で「石」と「チョウ」を観察することから制作を始めました。

中村は、自らの手で集めた物品や資料を探究しようとする視点と、石やチョウが見ている世界を想像しようとする視点を持ち合わせています。そうした視点をもとに木曽川の自然や暮らしを所蔵資料とともに再構成しようとする制作方法は、博物館という装置に新たな視座を与える試みでもあります。作家の足跡を辿るように、展示室から森のなかへと道のりが続いていきました。

【関連事業】

■ ミュージアムトーク　「チョウのように舞う」
9 月 23 日（日）13:00～16:30　緑のホール、企画展示室・美術工芸展示室、研修室、自然観察の森
参加料：無料　参加者：17 人

■ バスツアー「石のように転がる」
10 月 13 日（土）13:00～16:30　エントランスホール集合、木曽川沿い各所　参加料：無料
参加者：11 人

【展示品リスト】

1　中村裕太《石のように転がる》　インスタレーション　2018 年　　企画展示室

ギフチョウ	1983～2002 年採集	美濃加茂市民ミュージアム蔵
カンアオイ	2000 年採集	美濃加茂市民ミュージアム蔵
『昆虫世界』第 1 号	1897 年	岐阜県図書館蔵
木村小舟『昆虫翁・名和靖』	1944 年	岐阜県図書館蔵
≪小山観音≫	1917 年	美濃加茂市民ミュージアム蔵
今井秋雄《夕の祈》	昭和初期	美濃加茂市民ミュージアム蔵
下呂石	1972 年発掘	美濃加茂市民ミュージアム蔵
スクレイパー	縄文―弥生時代	美濃加茂市民ミュージアム蔵
切目石錐	縄文時代	美濃加茂市民ミュージアム蔵
ジョレン	昭和期	美濃加茂市民ミュージアム蔵
マンガ	昭和期	美濃加茂市民ミュージアム蔵
丸石問屋の法被	昭和期	美濃加茂市民ミュージアム蔵
≪玉石の運搬≫	1927 年頃	美濃加茂市民ミュージアム蔵
日本ライン看板	1990 年代	美濃加茂市民ミュージアム蔵
川石	明治―大正期	美濃加茂市民ミュージアム蔵
石畳道路資料	2003 年調査	美濃加茂市民ミュージアム蔵
ロープ	昭和期	美濃加茂市民ミュージアム蔵
ライン下りは太田から	1937 年頃	美濃加茂市民ミュージアム蔵
太田小唄	昭和期	美濃加茂市民ミュージアム蔵
林亮三《太田乗船場》	昭和期	美濃加茂市民ミュージアム蔵
木曽川渡船資料	明治初期	美濃加茂市民ミュージアム蔵
櫂	昭和期	美濃加茂市民ミュージアム蔵
吉田初三郎《日本ライン探勝交通案内図》	1928 年	美濃加茂市民ミュージアム蔵
林亮三《ライン下り坂祝町》	昭和期	美濃加茂市民ミュージアム蔵
志賀重昂書簡	1913 年	複製:原資料犬山市教育委員会蔵

2　中村裕太《日本ラインの石》　　インスタレーション　2018 年　　美術工芸展示室

映像、作品（石・紙・麻紐・木）

3　中村裕太《岐阜チョウの道》　　インスタレーション　2018 年　　美術工芸展示室

映像、アゲハチョウの標本、モデルプレート

4　中村裕太《チョウのように舞う》　インスタレーション　2018 年　　自然観察の森

作品（陶）、チョウの標本、タイル、日本ライン看板、モデルプレート、キャプションプレート